
ワイルドウィングス激闘史

須賀 隆太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ワイルドウイングス激闘史

【Nコード】

N2441B

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

関東の大学アメフト1部リーグの中では人数も一番少なく、弱小でいつも2部落ちの危機にさらされているワイルドウイングス。今年のリーグ戦では、何かが起こる……のか？

1st down:プロローグ

それは、秋も深まり始めた11月半ばのこと

「よし、この試合に勝てばオレたちワイルドウィングスの初優勝だ！相手は1部最強の政法大学せいほうだいがくだけど、みんな、気合入れていくぞ！」
見た目にもごつい防具をつけた屈強な男たちがその声に反応するかのように、

「おお　っ！」

と気合の雄たけびをあげる。

さあ、いよいよ関東大学アメリカンフットボール選手権も決勝の日がやってきました。今日対戦するのは昨年まで関東3連覇中の政法大ミサイルズと、完全なダークホース、山野大ワイルドウィングスです。両チームともここまでリーグ戦4戦全勝で今日の最終戦を迎えました。この試合に勝ったほうが東西大学王者決定戦「甲子園ボウル」の出場権を得られるというまさに運命の決戦！間もなくキックオフです！！

実況・解説席ではなぜかテンションの高い解説者がお茶の間に向けて絶叫している。

ピ　　ッ！！

高らかな笛の音と共に政法大のキックオフで試合が始まった。

ドサツ。

「いって……ゆ、夢か……」
ベッドから落ちて神 勇気は目を覚ました。

「なんだ、まだ夜明け前か。ま、あんな内容夢に決まってるよな……オレたちみたいな人数もまともにいない、常に2部落ちの危機にさらされてるようなチームが甲子園ボウルをかけて政法大と闘うなんて……とりあえず今年も2部に落ちないように頑張らないと。明日から今シーズン開幕だし、気合入れないとな。」

勇気はそうつぶやくと、もう一度寝なおすためにベッドへ戻るのだった。

物語はここから始まる

1st down:プロローグ(後書き)

これは、作者が大学でアメフトをやっていて、ちょっと書いてみたいと思っただけのストーリーです。

もちろん作品に登場する大学名やチーム名は架空のものです(とはいえほとんどは実在する大学名をいじくってつけてますが)

次回でポジション解説、主人公チームのキャラ紹介、基本ルールの簡単な解説など入れます。それを参考にしながら読んで感想などいただけたら幸いです。

2nd down:ルールなどの解説(前書き)

アメフトってやっぱりマイナーなスポーツなのでちゃんと解説しないとわからないですよね(笑)

2nd down:ルールなどの解説

まずはポジションなどの用語説明<()内はそのポジションの略称>

攻撃サイド

クォーターバック(QB)：攻撃の中心。すべての攻撃はこのポジションを基点に始まる。いわゆる司令塔。

ランニングバック(RB)：ボールを持って敵陣に走りこむ役目を持ったポジション。

ワイドレシーバー(WR)：QBから投げられたパスをキャッチする役目。

センター(C)、ガード(G)、タックル(T)：オフエンスライン(OL)といわれるポジションで、QBを守る盾となる前列のメンバー。体格のいい選手がやる。

タイトエンド(TE)：OLの隣にいて、QBがどんな攻撃スタイルをとるかによって、OLと一緒に敵を押ししたり、あるいはパスをキャッチするために走ったりもする何でも屋なポジション。

守備サイド

ディフェンスライン(DL)：3人または4人で敵のオフエンスラインをぶち破りQBを倒すためにいる。ディフェンシブタックル(DT)とディフェンスエンド(DE)がいる。3人のフォーメー

シヨンの場合、中央はノーズガード（NG）と呼ばれることもある。
ラインバッカー（LB）：敵のラン（走るプレー）もパスも両方止める役目を持った守備の中心。

コーナーバック（CB）：敵のワイドレシーバーへのパスを阻止する役目を持ったポジション。

セーフティ（S）：守備側の最終防衛線。ここで止められないと敵に得点を許すことになる。タッチダウンまた、上のCBとこのSを合わせてディフェンスバック（DB）ということもある。

キッカー（K）：攻撃でもなく、守備でもない。キックオフなどのボールを蹴る専門職。

続いて主人公チーム「山野大学ワイルドウィングス」の先発メンバー紹介。普通、攻撃と守備でメンバーは総入れ替えになるのですが、このチームは関東1部リーグの中では弱小でいつも2部落ちの危機にさらされ、さらに人数も少ないため大半が攻守両面になっているという設定です。（大体まともな1部リーグのチームであれば選手が50人はいます。）各選手のところを書いてある40y走の記録とベンチプレスの記録は足の速さとパワーを示すもので、40y^{II}約37m。

神 勇気^{じん ゆうき} クォーターバック
180cm、60kg。体格はあまりよくないため攻撃専門である。背番号1、3年。40y^{II}走5秒0、ベンチプレス55kg。

凱門 駿^{がいもん しゅん} ランニングバック
165cm、65kg。体格は小さいほうだが、その足が売り。背番号20、2年。40y走4秒5、ベン

ワイルドウィングス激闘史

チプレス50kg

森崎 光也もりさき こうや RB、Sセーフティ。163cm、50kg。凱門よりさらに足が速い。背番号21、2年。40y走4秒3、ベンチプレス50kg。

河嶋 翔太かわしま しょうた WR、CBワイルドレシーガーナーバツク。169cm、63kg。背は低いがジャンプ力があり、キャッチに特化した選手。背番号81、3年。40y走4秒9、ベンチプレス55kg。

神田 達弘かんだ たつひろ WR、CB。185cm、70kg。長身を活かして高い軌道のパスをもキャッチできる。背番号85、1年。40y走5秒0、ベンチプレス65kg。

内山 紀文うちやま のりふみ C、DTセンターディフェンシブタックル。176cm、102kg。攻守のラインの中心。そのパワーで敵を粉碎する。背番号55、3年。40y走5秒4、ベンチプレス100kg。

空賀 昭人くつが あきひと G、DTガード。178cm、95kg。ラインの一人。やはりパワーは半端なものではない。背番号62、2年。40y走5秒7、ベンチプレス90kg。

一橋 健太郎いちはし けんたろう G、DEディフェンスエンド。192cm、120kg。体格、パワーともにチームNo.1。背番号70、1年。40y走6秒0、ベンチプレス160kg。

山田 直宏やまだ なおひろ T、DEタックル。175cm、88kg。他のラインに比べると小柄だが、パワーはそこそこある。背番号77、4年。40y走5秒5、ベンチプレス85kg。

船山 大志ふなやま たいし：T、LB。185cm、80kg。バランスのとれた体格で攻守に活躍。背番号79、3年。40y走5秒1、ベンチプレス75kg。

柿坂 龍平かきさか りゅうへい：控え選手。179cm、72kg。QB、RBの控え。背番号12、2年。40y走5秒0、ベンチプレス65kg。

石町 健斗いしまち けんと：控え選手。167cm、65kg。主にRBの控えだが、TEやLBもこなせる。背番号41、4年。40y走4秒9、ベンチプレス55kg。

野川 一郎のがわ いちろう：控え選手。183cm、71kg。WR、CBの控え。背番号93、1年。40y走5秒0、ベンチプレス65kg。

小笠原 亮おがさわら りょう：控え選手。184cm、95kg。OL、DLオフラインの控え。背番号71、3年。40y走5秒8、ベンチプレス85kg。

佐野 智仁さの ともひと：控え選手。180cm、100kg。OL、DLの控え。背番号58、2年。40y走6秒0、ベンチプレス100kg。

浜崎 光輝はまさき こうき：控え選手。160cm、54kg。RB、LBまたはSの控え。背番号35、4年。40y走4秒6、ベンチプレス50kg。

中村 秀則なかむら ひでのり：控え選手。173cm、67kg。WR、CBの控え。背番号90、2年。40y走4秒8、ベンチプレス60kg。

基本ルール

・攻撃側は4回の攻撃権が与えられ、その間に「10ヤード」進

めれば、また4回の攻撃権が与えられる。できなければ攻守交替。

・攻撃側のボールを持った選手が敵陣ゴールエリアに入った時点タッチダウンで得点となり、6点が入る。さらにトライフォーポイント（TFP）といわれるボーナスゲームつき。TFPの詳細はまた後で。

・ゴールエリアの奥に立っているHの形をしたバーの間にキックを入れても得点が入るが、これは3点で、前述のTFPはなし。

・パスを投げたボールや、あるいは味方がこぼしたボールを敵に奪われると、その時点で攻守交替になる。（前者はインターセプト、後者はフアンブル）

・TFP：タッチダウンをとると、敵陣ゴールエリアまであと3ヤードの地点から、キックでゴールを狙うか、ランやパスでもう一度タッチダウンを狙うボーナスゲームができる。ここでキックが決まると1点、タッチダウンを取れば2点が追加される。もちろん敵も必死で守るのでタッチダウン狙いは失敗することも多い。よほどのことが無い限りはキックでゴールを狙うのが定石。別名PAT。ポイントアフタータッチダウン

その他はまた本編で随時説明を入れていく予定です。

2nd down:ルールなどの解説(後書き)

わからないことなどありましたら感想で書いていただければ気づき次第解説を入れます。

3rd down: シーズン開幕

9月18日、天気は快晴。勇気をはじめとするワイルドウィングスのメンバーはシーズンの開幕戦の会場がホームゲームとなる山野大のグラウンドだったので、自分たちの部室で試合前のミーティングを開いていた。

「いいか、みんな。オレたちは毎年のように2部落ちの危機にさらされてきた。だけど、今年こそは入れ替え戦に回らないようにひとつでも多く勝とうぜ!」

3年で主将を務める勇気がそう仲間たちに言った。

「神、今日の相手はどこだっけ?」

神と同じ3年で副将をやっているWR河嶋ワイドレがわむまがそうたずねる。

「今日の相手は去年1点差で負けた習学大フアントムズだ。初戦だから1年は緊張するかもしれないけど、大事にいこうぜ。」

勇気が今日の相手をみんなに告げる。

「おう!」

チームのメンバーの声がきれいにまとまった。

「よし、それじゃ、すでに相手チームには提出してある今日の先発メンバーを発表するぞ。まず、攻撃。QBはオレ、RBは凱門クォーターバックと森崎ランニングバック、WRは河嶋と神田モリ、ラインはCは内山センター、Gは空賀と一橋うちやま、Tは山田と船山ガード、TEは石町さんガード。守備はラインは攻撃メンバーそのまま、船山だけLBに入る。残りのLBは凱門と石町さん。CBはレシーバー2人。Sは森崎と浜崎コーナーバック、Kはオレしかないからオレがやる。これで行くぞ。よし、それじゃ試合前の最後の練習だ。みんな、行こう!」

勇気は先発メンバーをみんなに告げ、防具を持ってグラウンドへ移動した。

グラウンドには1部リーグの試合らしく、多少ではあるが観客が

いた。

「よし、それじゃみんな、プレーの確認をしておこう。走プレー、パスコース、いろいろやりたいところだが、もう試合まで時間が無い。かといっていつも練習でやってる、よく使うものをやると相手に作戦がばれる危険性があるから、ここはあえて昨日までの練習でやってない、あまり使わないプレーだけ確認するぞ。」

勇気はすでにグラウンド入りしている相手チームの様子を見ながらそう話す。

「いや、ちよつと待ってください。どうにも守備に不安があるからそつちを確認させてくれませんか？特に今日の相手のファントムズはオレたちの苦手とするショットガンフォーメーションを使ってくる難敵ですし。」

LBの凱門が勇気にそう頼む。

「よし、わかった。守備を確認しておこう。CBをやる河嶋と神田はしっかりと守れるようにしておけよ。」

勇気はそう決めて、自分と、控えのWRを使い、ショットガンフォーメーションの真似事をして、CBをやる河嶋たちに守らせる練習を何プレーか確認しているうちに、前の試合が終わり、自分たちのキックオフが近づいてきた。

「やっぱり前の試合は政法大の順当勝ちか。しかしスコアがまたすごいな。56 - 3か。やっぱ政法は強い。今年も関東を制覇して4年連続で甲子園を決めるのかな。」

河嶋が前の試合、政法大ミサイルズvs東明大シルバースターズの試合結果をスコアボードで見teそうつぶやく。

今年の関東1部リーグは6校で構成されている。政法大ミサイルズ、東明大シルバースターズ、習学大ファントムズ、殖沢大ラビッツ、城東大口ケッツ、そして勇気たちの山野大ワイルドウィングスだ。

審判から整列を促され、勇気たちはヘルメットを置いて整列し、

キックオフをして最初に守備から入るか、キックオフのボールをキヤッチして攻撃から入るかの選択をするセレモニーと呼ばれる試合開始前の恒例行事が始まった。

「それでは、フロントムズのキックオフで試合開始です。」

審判がそう宣言し、セレモニーは終わった。

「よし！キックオフリターンで攻撃からだ！みんな、行くぞ！」
勇気がみんなのところに戻るなりそう叫ぶ。

「うおっしゃ　　！神さん、いつものアレやりましょう！」

森崎がそう声をかける。

「わかつてる。　　野生の翼を広げて勝利へ羽ばたけ！オレたち」
ワイルドウイングス！」

勇気がそうチームの決まり文句を述べ、その後続く形で全員が
気合いっばいに叫ぶ。

「よし、行くぞ！リターナー、タッチダウン狙っていけよ！」

3rd down:シーズン開幕(後書き)

今回もいくつか解説を入れておきます。

・ショットガンフォーメーション: 攻撃のタイプのひとつで、走^{ラン}プレーよりもパスプレーに重点を置き、パスキャッチのレシーバーをショットガンの弾のように大量に走らせるフォーメーション。

・「野生のワイルドウイングス!」: 各チームで気合を入れるために考えるセリフ。チーム名にちなんだもので全員の士気を高めるためのもの。端から聞いてるとちよつと恥ずかしいものもある(らしい)

4 t h d o w n : 習学大ファントムズ戦その1 (前書き)

ついにシーズン初戦の幕開け!

4 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その1

「フロントムズ、ラッシュュー！ゴー！」

フロントムズのキッカー、西^{にし}がチームメンバーにそう合図を出し、ボールを蹴った。

蹴られたボールは空中高く飛び上がり、ワイルドウィングス陣内の凱門のところへ落ちてこようとしていた。

「オーライ！」

凱門はそう言うと、バスッ、といういい音と共にボールをキャッチし、走り出した。

「ガイ、前はオレに任せろ！」

凱門のことをガイと呼ぶ森崎が凱門の前に出てリードブロックカーとして走り出した。

ボールが高く上がっていたせいか、凱門がボールをキャッチして走り出すところにはフロントムズの選手たちがすでにワイルドウィングスの選手とガチンコバトルを繰り広げていた。

「ガイ、右が開いている！その敵はオレが抑えるから右へ行け！」

森崎が先のほうを見て凱門に指示を出し、自らは左から来たフロントムズの選手をブロックし、その間に凱門が駆け抜ける。

ワイルドウィングスのチーム内でもかなりの俊足を誇る凱門はあつという間にハーフラインを超え敵陣に入っていく、今また一人かわした。

（あと残ってるのは3人か。）

すでに単身敵陣を駆ける凱門に向かってきてる敵はあと3人。全員これ以上先へ進ませまいと目を血走らせて凱門に向かってくる。

（頭に血が上ったバカほど抜かすのは簡単だ。行くぜ！）

凱門は敵の位置を確認すると、まず一人目は右に行くふりをして左へ一気に走ることでかわしたが、2人目、スピんで抜かそうと思つたらスピンの方向を間違えてしまい、ついに止められた。

「うっし、凱門ナイスラン！」

敵をブロックしていた勇気がそう叫んだとおり、凱門の見事な走りによってワイルドウィングスの攻撃は敵陣のゴールまで15ヤード地点というタツチダウンには絶好の位置であった。

「よし、作戦会議！」

勇気が攻撃メンバーを次のプレーを決めるために集めた。

「もうゴールまで残り15ヤードだ。ここは今の勢いそのままに凱門に右の大外を走らせる…というフェイクを入れて実際は森崎に中央突破させる。ライン勢、道を開けてやれよ！コールワン、ブレイク！」

勇気がQBとして攻撃のプランを固め、仲間には指示を出す。

「おう！」

他の仲間たちも作戦を了承したという合図で手を叩き、フォーメーションの位置に着いた（セットした）。

「Ready! Set、Hut！」

Hutの声と共にCの内山からボールが勇気に渡り、プレーが始まった。

「あの細いQB潰せー！タツクルすればほぼ確実に退場させられるぞー！」

などといいながらファントムズのライン勢が向かってくるが、パワーで負けてはいないワイルドウィングスのライン勢が押し返していた。

勇気は、さつき立てた作戦通り前を走る凱門をスルーし、後ろの森崎にボールを渡した。

スルーして駆け抜けた凱門は右に抜け、ラインの横から敵のLBをブロックしに走りこみ、うまい具合にラインが開けたわずかな隙間を森崎が駆け抜け、凱門がLBをブロックしてくれたので、あつという間に駆け抜け、もう前にはSが2人いるだけであった。

（1対2か。ちょっときついか…でも、1ヤードでも前へ！）

森崎は2人のSに正面から戦いを挑む。

「2対1で勝てると思うなー！」

Sが2人いつぺんに飛び掛り、森崎はタックルをまともに食らって地面に叩きつけられた。

「山野大、11ヤード前進！ファーストダウン！」

審判は森崎の倒れた位置でボールを受け取ると、スタートした場所との距離を測り、そう宣言した。

「いよつしゃー！森崎、ナイスガッツ！」

「これで残り4ヤード。タッチダウンは目前だ！」

仲間たちが口々にそう言い、

「作戦会議！」

勇気が仲間に招集をかけた。

「よし、ここまでくればおそらく相手はランで来ると思うだろう。

しかし、そこをあえてパスで行く。河嶋、5ヤードイン。神田、3ヤードコーナー。2人はおとりで、石町さん、本命でショートストリート。コールワン、ブレイク！」

今度はパスということでレシーバー勢とタイトエンドに指示を出す。

「おう！」

仲間たちも手を叩いて作戦了承の合図を出し、セットした。

「Ready! Set、Hut！」

プレーが始まると同時に勇気は数歩下がり、その間に凱門や森崎のRBが前に出てラインと一緒に敵をブロックする壁になる。レシーバー2人は指示されたコースへおとりとして走りこみ、タイトエンド石町がその間に敵ラインの間へすべるように走りこむ。

「いまだ！」

勇気はその瞬間を狙って石町へ向けてパスを投げる。どうやらフアントムズは完全にレシーバーのほうに集中していたのが、石町は難なくボールをキャッチし、ゴールラインを超えた。

「タッチダウン!!!」

審判が両手を上げてタッチダウンを宣言すると、ワイルドウィン

グスの選手たちの雄たけびが響き渡った。

「よっしゃ！TFP行くぞ！トライフォーポイント作戦会議！ハドル」

その雄たけびの間をはいくぐるように勇気がハドルのために選手を集める。

「ここは定石どおりキックで行く。確実に点差を広げよう。ノーコーン、ブレイク！」

勇気がキックを選択し、仲間も了承したという合図を出し、キック体制のセットにつく。

「Ready! Set, Hut, Hut, Hut, Hut……」

勇気が何度かHutを繰り返し、6回目か7回目を数えたとき、C内山からボールが後ろに放られ、激しい当たりあいが始まった。一方放られたボールは凱門がキャッチ、地面に置いたキックテイクに固定した。その直後、勇気が思いつき走りこみ、ゴールの奥のHの形をしたバーに向けて蹴り飛ばす。蹴られたボールは激しく回転しながらHバーめがけて飛んでいったが、最後の最後で風にあおられて方向が変わった。だが、運良くバーにあたり、そのまま入った。

「キック成功！」

審判がそう宣言した。

「ひゅー、あつぶねえ〜〜！」

勇気が頭をかきながらそう言った。

タッチダウンのあとはタッチダウンをとったチームのキックオフから再開する為、ワイルドウィングスの選手はキックオフ専用の陣形に、ファントムズはそれをキャッチして反撃するための陣形にそれぞれセットした。

「ワイルドウィングス、オールメンラッシュ！ゴー！」

勇気は「ゴー！」にあわせてボールを高く蹴り上げ、他の10人はそれと共に敵陣めがけて走り出す。

「あのリターナー、初心者だ！確実に潰せよ！」

「勇気はボールを蹴ったあと後ろから追っていたが、敵のリターナー（ボールをキャッチして走る役目）がおろおろしているのが確認できた。」

「うおおおおおー！」

ワイルドウイングスのライン勢が内山を先頭に突撃していく。フアントムズは必死にブロックしようとするが内山や一橋のパワーに負けて弾き飛ばされていった。

ボールは高々と上がり、今やっと落ちてこようとしていた。しかし、勇気が見抜いたとおり敵のリターナーは初心者だったらしく、ボールキャッチに失敗、ボールは地面を転々とし始めた。

「あわわわ……」

リターナーは必死にボールを追いかけ、やっと追いついてボールを確保した直後、内山にタックルされて潰された。

「フアントムズ、ファーストダウンは自陣10ヤード地点から！」

審判がそう宣言した。

「くっそー、こりやまずいな。しかし、僕らのプレーは決まればビツグゲインが見込める。みんな、頑張ろう！」

フアントムズのQB、大東が仲間たちにそう言った。

「守備はオレは出ないんで、ハマさん、お願いしますね。」

勇気はベンチに戻りながら、すでにフィールドに飛び出そうとしていた浜崎にそう言った。

「ああ、任せとけ。すぐにまた攻撃に回してやるよ。」

浜崎はそう言いながら仲間の待つフィールドに飛び出していった。

「それじゃ、練習どおり、ショットガンに対応した守備フォーメーションでいこうぞ。ブレイク！」

デイフェンスのリーダーを務める石町が仲間们に指示を出す。

「OKです！」

他のメンバーも了承の合図を出し、セツトに着いた。

「Ready to go、Set、Hut！」

大東がコールを出し、ボールが放られてプレーが始まった。

ショットガンの陣形の特徴は通常レシーバー2人の所を4人おき、RBを一人も置かないところにある。

4人のレシーバーがまさにショットガンの弾のように走り出し、パスのコースに走りこむ。それに対しワイルドウィングスはLB3人のうち2人を正規のCBに追加して配置し、中央はLB一人とS2人で守る陣形を敷いた。

「バックスのフォーメーションは関係ねえ、オレたちラインがQBを潰せばそれで終わることだ！」

内山が叫び、ラインを突破した。そのままQBにタックルをかまそうとするが……

「冗談じゃない、タックル食らってたまるか！」

大東はボールを地面に叩きつけてパスをわざと失敗させた。と、そこで第1Qが終了した。

4 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その1 (後書き)

今回もいろいろ解説タイム

・リードブロッカー：ボールを持つ選手の前を走り、ボールを持つ選手を潰そうと向かってくる敵をブロックするための選手。

・コールワン、ブレイク：プレー開始の合図となるコールの種類のひとつ。ブレイクは味方がそれを確認、了承したという合図。言い回しは各チームでいろいろある。

・ Ready Set Hut：コールワンの場合のワイルドウィングスのブレースタート合図。これもいくつか種類があるようだ。

また、1試合は15分×4Qで行われる。第2Qと第3Qの間のハーフタイムには本当の1部リーグや社会人リーグ、本場アメリカのナショナルフットボールリーグNFLだとチアガールたちによるショーが行われます。年末年始は探してみると結構テレビで放送してるかも？

他にわからないことがあれば遠慮なく書き込んでください。感想お待ちしています。

5 t h d o w n ・ 習学大ファントムズ戦その2 (前書き)

今回はちょっと短めです、ご了承ください。

5th down：習学大ファントムズ戦その2

第2Qに入り、ファントムズの攻撃、2回目（2nd down）で残り10ヤード。

「Ready to go、Set、Hut！」

大東のコールでプレー開始、パスを投げたが……

「しまった！」

どうやらコントロールを誤ったらしく、投げられたボールはCB神田のところへ飛んできていた。

「いただき！」

神田は急いで取りに来ていたファントムズのレシーバーをその長身で防いでボールをもぎ取ると、そのままファントムズのゴールラインに走りこんだ。

「タッチダウン！」

審判が両手を上げてそう合図する。

「いよっしゃあ！」

ワイルドウィングスの歓喜の音が響き渡り、一方パスをインターセプト（敵に取られること）されたファントムズは呆然としていた。ワイルドウィングスはTFPのキックもきっちり勇気が決めて14-0とリードを広げた。

その後は両チーム一進一退の攻防が続き、第2Qも終了した。

「よし、前半は14-0と最高の展開だ。後半もこのまま押し切るぞ。」

ハーフタイム、勇気がみんなにそう告げる。このチームは監督がいないため、OBの人に監督代行を努めてもらっている。しかし、選手たちのことには口出ししないというスタイルをとっているので、こうしてキャプテンの勇気がみんなを引っ張っているのだ。

一方、フロントムズは

「お前ら、ワイルドウィングスは格下だぞ。そんな相手に14点差もつけられて悔しくないのか!？」

監督と思われる人物が選手たちに怒鳴っていた。

「まずはQB大東。第2Qでのあのパスはなんだ、あれきっちり決めてれば同点が悪くても7点差で折り返せていただろう。一応後半もお前で行くが、次ミスしたら即交代させるからな。それと、ライン。もう少しパス壁持たせてやらないとショットガンの真骨頂が活かせないだろうが。もつとしっかりしろ！」

続けざまに選手たちの失敗を上げてしかっていくフロントムズ監督。

「はい！」

選手たちも失敗はわかっているのに、反論することも言い訳することもなく素直に返事する。

そして、後半開始のセレモニー（前半のときと違って単に確認するだけ）が始まった。

「よし、後半は守備からだ。しっかり守って攻撃につなげてくれ。」
勇気がキッカーとして位置につき、キックオフで後半が始まった。

5 t h d o w n : 習学大ファントムズ戦その2 (後書き)

14 - 0といい形で前半を終えて折り返したワイルドウィングス。
後半もこのまま乗り切れるか？

6 t h d o w n : 習学大ファントムズ戦その3 (前書き)

こちらにも4日ほど更新が止まっていたことをお詫びいたします。

6 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その3

後半開始のキックオフで勇気が蹴ったボールはかなり遠くまで飛び、フロントムズのリターナー大東（前半でミスをした初心者はすでにベンチに下げられていた）ががちりキャッチし、走り出した。

「止める　っ！」

勇気が後ろから走りつつ前に行くほかの選手たちにゲキを飛ばす。

「うおおおおお！！！」

ライン勢を先頭にブロックしに向かってくる敵をなぎ倒したりかわしたりしながら大東に突撃していき、どうにかタックルして止めた。

「習学大、敵陣45ヤード地点からファーストダウン！」

審判が大東の倒された位置でそう笛を吹いて宣言した。

「ちっ……かなり戻されたな。だけど、敵はショットガンフォーメーションだ。パスをインターセプトすればあつという間にこっちの攻撃にできる。狙うはパスのボールただひとつ！守るぞ！」

浜崎がみんなにそう叫ぶ。

「おう！」

他の仲間もそれに応え、守備の位置についた。

「Ready to go、Set、Hut！」

フロントムズの攻撃が始まり、QB大東にボールが渡った。

「そこだあ！」

大東はレシーバー1人フリーになったところを見逃さず、そこへパスを投げ込み、成功させた。パスをキャッチした選手はさらに進もうと走り出したところでLB凱門にタックルされてプレーが止まった。

「習学大、13ヤード前進^{ゲイン}、ファーストダウン獲得！」

審判が位置を確認して、そう叫ぶ。

「今のは俺のミスだ。ガイ、ナイスカバー。」
浜崎が自らのミスを認め、カバーした凱門に礼を言った。

「Ready to go, Set Hut!」
再びファントムズの攻撃が始まり、大東がパスを投げる。しかし、今度はCB神田がパスを弾き落とし、パスは失敗した。

「Ready to go, Set Hut!」
ファントムズ2nd down。今度は大東がパスを投げると見せかけて自ら走りこみ、6ヤード前進。ファーストダウン獲得まで残り4ヤード。

「Ready to go, Set Hut!」
ファントムズ3rd down。TEへのショートパスで5ヤード獲得、敵陣21ヤード地点でファーストダウン更新。

「くっそー……やっぱり地力は向こうのほうが上か……？」
ベンチで勇気がそうつぶやく。と、突然立ち上がり、
「タイムアウト!!」

審判にタイムアウトを申告した。
「山野大、タイムアウト。後半1回目。第3Q残り時間45秒。」
審判が時計を止めてタイムアウトを認めた。選手たちがいったんベンチに戻ってくる。

「みんな、今はピンチだけど、もう第3Qも残りわずか。第4Qの15分を残すのみだ。その状態で14点リードしてるんだから、落ち着いて守ろう。それじゃ、頼んだぞ!」

勇気はみんなを励ますためにタイムアウトを使い、そう言った。

タイムアウトが終わり、両チームが元の位置へ戻った。

「よし、ここ守りきってこちらの攻撃にできれば流れは完全にこっ

「ちのものだ。みんな、気合入れていくぞ！」

浜崎がディフェンスリーダーとしてみんなにゲキを飛ばす。

「おっ！」

全員がそれに応え、守備位置についた。

「Ready to go, Set Hut！」

フロントムズの攻撃が始まった。大東がパスターゲットを探すべくキョロキョロ見回すが、走らせているレシーバーは全てしつかりとマークされていて、まったく投げられなかった。そうしているうちに壁にしているラインが力尽き、ワイルドウイングスのライン勢が突破してきた。

「ちいっ！」

大東はその場にボールを投げ捨て、パスを失敗させた。

「フロントムズ、パス失敗インコンプリート！それと、第3Q終了です。」

審判がパス失敗で時計を止めたが、直後に第3Q終了と叫んだ。

「よし、あと15分、このまま逃げ切るぞ！」

6 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その3 (後書き)

さあ、まぐれかそれとも今年は強くなれたのか、ワイルドウィングス14点リードで最終クォーター突入だ！このまま逃げ切れるのか？

7th down : 習学大フロントムズ戦その4 (前書き)

いよいよ最終クォーターへ！試合の行方はどうなるのか？

7th down: 習学大ファントムズ戦その4

「習学大、敵陣21ヤード地点より2nd down。ファーストダウンまで残り10ヤードで第4Qに入ります」

審判がそうフィールド上の選手やベンチサイドに告げて、笛を吹いた。プレー開始の合図だ。

「Ready to go, Set Hut!」

大東のコールでファントムズの攻撃が始まった。しかし、今回もレシーバーは全てマークされていて投げられそうになかった。そこで大東はパスをあきらめ自ら走るプレーに切り替えた。

「QBだ!止める っ!!!」

ベンチから勇気が叫ぶ。レシーバーにマークしていたCB神田がタックルに行つてどうにか止めた。

「習学大、9ヤード前進!ファーストダウン獲得まであと1ヤード!」

審判がそう宣言する。

「いまのしようがない。パス通つたら一発でタッチダウン取られてしまうからな。QBが走ってくるのはある程度あきらめるしかない。だけど、次は止めるぞ!」

浜崎が次の作戦会議でそう話す。

「おう!」

声がそろい、それぞれの守備位置へ散っていく。

「Ready to go, Set Hut!」

大東のコールが響き、3rd downの攻撃が始まった。と、ボールを持った大東はパスの態勢をとらずにラインの中心部めがけて突っ込んできた。

「力づくで突破しようってか!くそ、潰せ!」

ラインが踏ん張ったおかげでラインの間を抜かせることなく大東を弾き飛ばした。

「習学大、1ヤード前進^{ゲイン}、ファーストダウン獲得！ゴールまで残り11ヤード！」

審判がメジャーで測ってそう判定し、習学大ベンチから歓喜の声が上がった。

「浜崎さん！」

勇気がベンチから浜崎を呼ぶ。浜崎が振り向いたところで勇気はなにやらサインのようなものを送った。

「OK、わかった！」

浜崎はそのサインを了承し、守備の作戦会議^{ハドル}でみんなを集める。

「よし、みんな、キャプテンからの電撃突撃^{フリック}のサインだ。ここまで進めたらパスだろうとランだろうと少し進めたらタッチダウンだ。後ろは気にせずLB3人で行くぞ。念のためにSの2人は少し前に守ってくれ。」

浜崎が作戦をみんなに伝え、守備位置につく。

「Ready to go, Set Hut！」

大東のコールで攻撃が始まると同時にLBの凱門、浜崎、船山がそれぞれラインの両脇、そして中央から突撃をかける。

「電撃突撃^{フリック}だ！大東、気をつける！」

ラインの一人がDLと一緒に中央突破を狙った船山を抑えながら後ろの大東に声をかける。しかしそのときにはすでに凱門が大東の目の前に迫っていて、大東はボールを投げ捨てる暇もなくタックルされた。

「習学大、5ヤード後退^{ロスト}」

審判がそう告げる。

「よし！ナイスだ、ガイ！」

浜崎が凱門とハイタッチをした。

「この調子で守りきましょう。次はどうしますか？」

凱門が浜崎にたずねる。

「そつだな。今度は凱門が行くと見せかけて誰も行かないノーブリッツだ。」

浜崎が指示し、守備位置に散っていく。

「Ready to go, Set Hut!」

大東のコールで2nd down開始。さっきのブリッツを警戒してか、ショートパスで3ヤード前進^{ゲイン}、ファーストダウンまで残り12ヤード。

「Ready to go, Set Hut!」

3rd down。イチかバチかのロングパスを使ってきた大東。CB神田が手にかすらせて軌道が変わり、失敗かと思われたが、レシーバー^{むひやま}村山の最後の意地が光り、片手で回転を止めキャッチするというフラインプレーを見せた。

「習学大、10ヤード前進^{ゲイン}！ファーストダウンまで残り2ヤード、ゴールまであと3ヤード!」

審判さえも興奮気味にそう告げ、習学大ベンチは俄然盛り上がった。

「ちつ……今のプレーは相手のレシーバーをほめるしかないな。神田を責めることはできない。ここまできたらおそらくごり押しのレストランかショートパスで安全にタッチダウンを狙ってくるだろう。だけど、これが4th downだ。ここきつちり止めてオレたちの攻撃でトドメを刺す。またLB3人の電撃突撃^{ブリッツ}行くぞ!」

浜崎が指示を飛ばし、守備位置につく。

「Ready to go, Set Hut!」

さすがにゴールまで残り3ヤードということもあり、大東は4th downで選択することの多いフィールドゴールキックは狙わず、ショートパスの態勢をとった。しかし、ターゲットがマークされていると見るやすかさず自ら走りこんだ。

「タッチダ ウン!」

審判が両手を上げてそう叫んだ。

「よし、いいぞ!」

習学大ベンチから監督が叫ぶ。

「ここまで追い詰められたら取られるのは仕方ないか。切り替えて

「いじつ。TFP守るぞ。」

トライフォーポイント

浜崎が少し落ち込んだ表情をしているほかの選手たちを励ます。

「どうやら習学大のTFPは定石どおりキックで来るらしい。大東がボールを抑える役、そしてその後ろにはキッカーの西が蹴る態勢を整えていた。」

「Ready to go, Set Hut Hut Hut……」

大東のコールが響き、何回目かのHutでボールが後ろに放られた。大東がそれを取り地面においたキックティーに固定する。そこに走りこんだ西がボールを蹴ったのだが

「しまった、弾道が低い！」

西が蹴った直後にそう叫んだとおり、蹴られたボールはあまりあがらず、Hバーの下を潜り抜けていった。

「習学大、TFPキック失敗！14-6でワイルドウィングスリード、第4Q残り7分24秒！」

審判が腕を下で振ってキック失敗を示し、各選手は作戦会議ハドルのあとキックオフの布陣に散っていった。

キックオフで試合再開となり、ファントムズのキッカー西が蹴ったボールは森崎がキャッチし、走り出した。森崎はさすがにチーム1の足の速さを持つだけあり、あっという間にハーフラインを超えて敵陣に入ったが、今回はそこで捕まった。

「ワイルドウィングス、敵陣37ヤード地点よりファーストダウン！」

審判がそう両陣営に告げた。

勇気がフィールドに戻り、攻撃の作戦を立てると、

「Ready Set Hut！」

そのコールと共に攻撃を始めた。しかしこれ以上点をやれないファントムズは守備固めのためのメンバーがいたらしく、メンバーチェンジをして守備に臨んでいた。その効果があつて森崎の中央突破

はわずか2ヤードしか進めなかった。

結局その後もろくに進めず、4th downになってもファーストダウンまで残り3ヤード、ゴールまで30ヤード残していた。

「ちっ……仕方ねえ、フィールドゴール狙うぞ。この位置なら失敗して相手の攻撃になっても十分凌げる範囲だと思うからな。」

勇気は4th downの攻撃をキックでゴールを狙うと決めた。

「な、なに!?!この距離でフィールドゴールだと?ポストまでは40ヤード以上あるというのに、無謀なことを……」

フロントムズの監督はベンチから勇気たちの布陣を見て驚きのあまり立ち上がっていた。しかし、すぐに落ち着いたのかすぐにまたイスに座った。

「Ready Set Hut Hut Hut……」

勇気がキックのとき特有のコールをし、何回目かで放られたボールはRB凱門がキャッチし、さきほどのフロントムズのTFPのとき同様地面のキックティーに固定した。そこに走りこんだ勇気が派手にボールをかつ飛ばした。ボールはものすごい勢いで飛んでいき、入るかと思われたのだが、あと少しのところ失速し、ゴンという鈍い音とともにボールは力なく地面に落ちた。どうやらバーに跳ね返されたらしい。

「ワイルドウィングス、キック失敗。自陣30ヤードからフロントムズの攻撃、残り時間3分57秒。」

審判がそう告げ、攻守交代で勇気はベンチに下がったのだった。

7th down：習学大ファントムズ戦その4（後書き）

追い上げてきたファントムズ、逃げるワイルドウィングス。8点差のまま試合は最終局面へ！次回、決着！！

解説タイム

・電撃突撃^{フリック}：守備の作戦のひとつで、主にLBやSなどが自分の守備範囲を放棄し敵へ奇襲をかける作戦。成功すればいいが失敗するとその選手の守っていた場所がから空きになるため何らかの対策を立ててから使うことが多い。（例：最初に使った場面において、LB3人が抜けた部分をSの2人にカバーさせていたこと）

他にもわからないことなどあれば感想やメッセージにてお待ちしています。

8 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その5 (前書き)

まず、お詫びです (またはか

1 s t d o w n のプロローグの中にミスがありましたので修正しました。(「山野大・政法大ともに5戦全勝で」のくだりのところで、リーグは6校で争っているのに決勝で5戦全勝ということはありえない。正しくは4戦全勝同士という形になります。)

8th down：習学大フロントムズ戦その5

「よし、相手は今のキックミスで多少なりとも動揺があるはずだ。ここで点を取って最低でも引き分けに持ち込むぞ！」

大東が攻撃の作戦会議ハドルの中でそう仲間たちに話しているのが聞こえた。どうやらわざと聞こえるように話しているようだ。

「大丈夫、落ち着いていこう。仮にタッチダウン取られてもTFPでタッチダウン取られなければ同点にはならないんだから。」

わずかに動揺の色を見せるワイルドウィングスの選手たちのなかでただ一人落ち着いている浜崎がみんなを落ち着かせるべくそう言った。

「そうか、そうだよな。まだうちが8点リードしてるんだから。しかも残り時間は4分を切ってるんだ、落ち着いて守れば十分間に合うはず。」

それに同調するように凱門がそう言っつて各選手は守備位置に散っていった。

「Ready to go, Set Hut！」

大東のコールが響き、タッチダウンを取ろうと血走った目をしたレシーバーたちがそれぞれ大東から指示されたコースへ走りこむ。

しかし、ワイルドウィングスのCBやLBがしっかりとマークしているのでなかなか投げられず、自ら数ヤード走りこみ、時間を稼ぐためフィールドの外に出て時計を止めた。

「習学大、7ヤード前進ゲイン。残り時間3分34秒。」

審判が笛を吹いてそう言った。

「Ready to go, Set Hut！」

フロントムズの2nd down。レシーバーへのパスが成功し13ヤード前進。敵陣40ヤード地点でファーストダウン更新となる。残り時間は3分10秒とのことだ。

「Ready to go, Set Hut!」

ここで大東は先ほどの奇跡よもう一度と言わんばかりにロングパスを仕掛けてきた。ターゲットはまたも村山。しかし、そう何度も奇跡が起こるわけはなく、ボールは村山の手をかすりその先へ落ちた。

「パス失敗、残り時間2分55秒。」

審判がそう告げた。

「くっそー……もう時間が無いぞ。ロングパスで稼ぐしかオレたちの逆転の方法は残されてない。行くぞ!」

大東は作戦会議で仲間たちにそう告げたのだった。

「Ready to go, Set Hut!」

パスが失敗したので同じ敵陣40ヤード地点から2nd down。またもロングパスを狙っていき、村山が神田を振り切ったところを狙って大東はパスを投げる。村山はこれを難なくキャッチし、時計を止めるためフィールドの外へ出た。

「習学大、20ヤード前進!残り時間はちょうど2分!」

審判が時計を止めてそう言う。

「とりあえず、このまま時間を潰させたいから、なるべく相手をフィールドの外に出すな。中で捕まえるんだ。ロングパスはとにかく通させない。あと2分守りきればうちの勝ちだ。気合入れていくぞ!」

浜崎が他の選手たちにそう指示を飛ばし、守備位置に散っていった。

「Ready to go, Set Hut!」

大東はロングパスを警戒されたと見て、ショートパスをつないだあとフィールドの外に出る作戦をやるうとしたが、あと少しのとき

るで外に出ることができず中で倒された。

「習学大、3ヤード前進」

審判が笛を吹いて時計を確認している。

「タイムアウト！」

たまらず大東はタイムアウトを宣言する。

「習学大、タイムアウト。後半1回目。残り時間1分13秒。」

審判が時計を止めて笛を吹いた。

「まあ、残り1分ならもう逆転はないな。楽にいこう。」

浜崎は笑顔でみんなにそう話す。

「はい！」

みんなもピンチで顔がこわばっていたが、浜崎の言葉で笑顔を取り戻した。

「Ready to go, Set Hut！」

大東はショートパスで村山にボールを投げ、村山はきっちりキャッチしたのだが、ここでハプニングが起こった。

村山にマークしていた神田のタックルによって村山がボールをこぼし、押し合いをしているラインたちのほうへ転がっていったのだ。

これにいち早く反応したのはなんとワイルドウィングスのDT、ディフェンシブタックル

内山だった。内山は転がるボールのバウンドを読みうまく拾い上げると、

「ひゃっほ　っ！！」

と雄たけびをあげながら走り出し、あ然としてスタートの遅れたファントムズの選手をあつという間に振り切り、タッチダウンを奪い取ったのだった。

「なんてこった……ラインにタッチダウン取られるなんて……」

ファントムズの選手も監督も口々にそう言っていた。

結局、その後のTFPも勇気がキックをきっちり決め、21 - 6

とリードを広げ、試合再開のキックオフを終えたところで試合終了の笛が鳴り響いた。

「よっしゃあ！初戦を勝利で飾れるとは今年はいいスタートだな！」

8 t h d o w n : 習学大フロントムズ戦その5 (後書き)

珍プレーが飛び出してフロントムズにトドメを刺し勝利を収めたワイルドウィングスだったが……

この先他のリーグ戦も書くつもりでしたが、なんか同じような展開しかかけなさそうなので、申し訳ありませんがカットさせていただきます。ただ次はネタバレになります但最终戦とさせていただきます。

ご了承ください。

内容についてわからない点などありましたら書き込んでくだされば幸いです。

9 t h d o w n : 初戦を終え、最終戦直前までの経過 (前書き)

初戦に勝利したワイルドウィングス。その後はどうなったのか？

9th down：初戦を終え、最終戦直前までの経過

初戦を飾ったワイルドウィングスはその後のリーグ戦でも接戦を繰り返していった。

2戦目の東明大シルバースターズ戦では勇気のフィールドゴールのみで3-0の辛勝、3戦目、殖拓大ラビッツ戦では点の取り合いになり42-40というギリギリの勝利と、これで過去最高だった2勝を超え、この時点で3戦全勝という状態で臨んだ城東大ロケッツ戦は、前半終了時で0-24と大量リードを許し、敗戦濃厚かと思われたが、後半盛り返し、31-30で逆転勝利を収めたのだ。

そして4戦目を終えた翌日。

勇気は手に新聞を持って部室へ駆け込んだ。

「おい、コレ見るよ！オレたちのことも書いてあるぜ！」

勇気がそう言って新聞を広げると、

“ 関東大学1部リーグで大波乱 山野大が甲子園ボウル関東代表を賭け政法大と決戦へ ”

という見出しがでかどかと躍っていた。さらに記事を読むと、

“ 前年まで2部落ちの入れ替え戦に回り続けていた山野大にいったいどんな奇跡が起きたのか？決戦は6日後 ”

という内容で書いてあった。

「ここまで4戦全勝で最終戦はあの政法大か……向こうはオレたちが接戦で勝ってきた相手をすべて大差で破つての4戦全勝……実力は確実に相手の方が数段上回ってるよな……」

勇気がそうつぶやいたとおり、政法大は初戦の東明大シルバースターズ戦に56-3の大差で勝ったあと、2戦目の城東大ロケッツ戦を大会記録となる126-0で破り、3戦目の習学大ファントムズ戦は70-12、4戦目の殖拓大ラビッツ戦は2戦目の大会記録

には及ばないものの112-7で勝って4戦全勝としている。

新聞各紙でも今年の政法大は関東3連覇を達成した昨年のチームよりさらに実力は上と分析し、さらに一部の新聞では山野大vs政法大のスコア予想まで立てていたが

「おいおい……この予想はひどくないか？なんだよ、山野大の0-150での敗戦って……」

勇気が持ってきた新聞にはそのスコア予想が載っていたのだが、それを見て勇気たち全員言葉を失ったのだった。

「しかし、よりによってあの政法大か……オレにとってはまさに因縁の対戦となるだろうな……」

しばらく新聞記事を読んだ後、不意に勇気がつぶやいた。

「どうということっすか、神さん？」

凱門が勇気にたずねる。

「いや、政法大にはオレの高校時代のライバルがいるんだ。これまでの2年間は直接闘うチャンスがなく、今度の試合は3年ぶりの対決になるんだ。かつての対戦成績はまったくの五分。試合の結果はともかく、そいつにだけは負けたくない、いや、負けるわけには行かないんだ！」

勇気は手を固く握り締めながらそう叫んだ。

そして、あっという間に時間は過ぎていき、決戦の朝がやってきたのだった。

9 t h d o w n : 初戦を終え、最終戦直前までの経過（後書き）

奇跡の4連勝で最終戦は全勝対決となる政法大ミサイルズ戦。

この実力差を跳ね返せるのか？

次回、決戦開始！

10th down: 最終戦当日、ライバル登場(前書き)

いよいよ最終戦の日がやってきた。
会場に着いた勇気たちは

10th down：最終戦当日、ライバル登場

最終戦の政法大戦の会場はどちらの大学でもなく、プロが試合するようなかなか設備の整ったスタジアムであった。

「す、すげえ……芝は天然芝だし、何よりスタンドがすごいことになってるぜ……」

勇気がユニフォームに着替え、防具を持ってグラウンドに出たところでそうつぶやいた。

この会場は勇気たちがこれまで経験したことのない天然の芝で、さらには観客を1万人は収容できるだろうなスタンドまであった。勇気に続いて出てきたほかの仲間たちも驚きを隠せないようだったと、そのとき。

「よお、久しぶりだな、神。」

勇気たちが話しているところにグラウンドの反対側から一人の男が歩いてきてそう言った。

「ああ、3年ぶりぐらいだな、土井^{どい}。」

勇気はその男を土井と呼んでそう言った。

「同じ高校で同じQBとしてポジション争いしてたのがなつかしいな。お前は山野大、オレは政法大と進路は違ったがまたお前と勝負できる日が来て正直うれしいぜ。だけど、この試合、お前らに勝ち目はゼロだ。恥をかかないうちに棄権して帰ったほうがいいんじゃないのか？」

土井は勇気と勝負できる日が来てうれしいとか言いつつ、挑発してきた。

「なんだと！」

森崎と凱門が食ってかかろうとする。しかし、

「二人ともやめるんだ。全ては試合で答えを出せばいい、そうだろう土井？」

勇気が二人を制止し、土井にそう言った。

「ちつ……まあ、せいぜいオレたちをがっかりさせないような試合にしてくれよな。」

土井はそう言って自らのベンチに引き上げていった。

「くそつ、なんなんだ、アイツは!？」

怒りの収まらない凱門がそう叫ぶ。

「落ち着け、ガイ。お前は守備でLB、アイツはQBをやってるんだから守備でアイツをぶつとばせばいいだろう。違うか？」

一番ボロくそに言われた勇気がそう言って凱門をなだめる。

「神さんはあそこまで言われてなんで黙ってられるんです!？」

それでも収まらない凱門がなおも勇気に詰め寄る。

「オレだってまったく怒ってないわけじゃなく、あそこでオレがキれるのは簡単だ。だけど、そこでキレて暴力振るったらいままで勝ってきたのが全部パーになるだろうが。そこまで考えないとダメだろう。」

勇気は半ば呆れたようにそう言うと、

「それに、言いたいやつには言わせておけばいい。口でなんとかわれようが全ての答えはフィールドで出すんだ!いいな!」

続けてそうゲキを飛ばした。

「神さん……うっす!!」

それでようやく凱門も落ち着きを取り戻し、他のチームメイトと共にストレッチを始めるのだった。

さあ、いよいよ関東大学アメリカンフットボール選手権も最終決戦の日を迎えました。今日の対戦カードはともにこれまでリーグ戦4戦全勝同士の対決!まずは関東3連覇の常勝・政法大ミサイルス!間違いない今年は過去最強のチームで4連覇を目指します!一方対するは過去4年毎年2部落ちの危機にさらされてきた山野大ワイ

ルドウイングス！いたいこのチームにどんな奇跡が起こったのか？そして政法大の4連覇を阻止することはできるのか？間もなくキックオフです！

どうやらこの試合は急遽テレビ中継が決まったらしく、実況と解説までいるようだ。実況らしい人のマイクを通した声がフィールドにまで聞こえていた。

「間もなくセレモニーを始めるので両チーム整列してください。」

審判が一人ずつ両チームのベンチへ向かい、そう告げた。

「よし、行くぞ！」

「おう！」

勇気の声に全員が応じ、全員フィールドに沿って整列した。

「しかし、こうして整列すると人数の違いがはっきりわかるな……」

勇気がそうつぶやいたとおり、ワイルドウイングスは全員そろっても20人に満たない少人数チーム、対するミサイルズは全員が一列に並ぶとかなり長く、軽く見積もっても70〜80人はいるように見えた。

セレモニーの結果、ワイルドウイングスはキックオフをして守備からと決まった。

「よし、まずきっちり守つていい形で攻撃に入ろう。野生の翼を広げて勝利へ羽ばたけ！オレたち『ワイルドウイングス』！」

勇気たちはいつもの決まり文句で気合を入れた。一方ミサイルズ側も……

「攻撃のときはかならずタッチダウンを取るんだ、いいな！オレたちは敵を殲滅するまで止まらない！近代兵器の力思い知らせろ！我ら『政法大ミサイルズ』！」

キャプテンを努めているらしい土井のその言葉に合わせて気合を入れていた。

「行くぞ、みんな！ワイルドウィングス、オールメンラッシュ！レ
ディー、ゴー！」

勇気の声とともにボールが高々と蹴り上げられ、試合が始ま
ったのだった。

10th down:最終戦当日、ライバル登場(後書き)

さあ、勇気本人は忘れていたようだがこれは前に見た夢とそっくりだ。

ついに始まる最終戦！勇気たちに勝機はあるのか？

11th down: 開戦・政法大ミサイルズ戦その1

キックオフで蹴り上げられたボールは相当な飛距離を見せ、敵陣奥深く、ミサイルズのリターナーがギリギリまで下がってボールをキャッチした。

「潰せ　っ!!」

ワイルドウィングスの選手たちが敵に進ませまいと突っ込んでいき、中でも一番気合が入っている凱門が見事なタックルを食らわせ、相手を止めた。と、そのとき。リターナーの腕からボールがこぼれ落ちた。

「フアンブル!」

すぐに凱門とリターナーが同時にこぼれて転々とするボールに飛びついた。その結果

「攻撃権はワイルドウィングス!」

審判が笛を吹いてそう宣言した。

「いよっしゃあ! ナイスリカバーだ、ガイ!」

勇気がハイタッチで凱門を迎えた。

なんとなんと、開始早々予想外の展開だ! キックオフリターンのボールを見事なタックルでこぼさせ、飛びついた凱門くんの確保により最初の攻撃権はワイルドウィングスに与えられました!

実況席ではそうテンションの上がりきったアナウンサーがマイクをひつつかみそう叫んでいた。

「ワイルドウィングス、敵陣35ヤード地点よりファーストダウン!」

相手がこぼしたボールを確保したことにより最初の攻撃権を敵陣からという絶好の位置で始めることができたワイルドウィングスはかなり盛り上がっていた。

「よし、まずは先制点を目指すぞ。相手は1部最強で関東3連覇の政法だけど、頑張ろう。ファーストプレーは凱門に走らせる。森崎は先にオレからボールを受け取るフリをして素通りしたあと凱門のリードブロッカーにつく。コールワン、ブレイク!」

作戦会議を終え、各選手ポジションへ散っていく。

(土井にプレッシャーを与えるためにもここはタッチダウンが欲しい……)

「Ready Set Hut!」

勇気のコールとともにワイルドウィングスの攻撃が始まった。作戦通りまず森崎を素通りし、後ろの凱門にボールを渡す。凱門が走り、敵のディフェンスを突破しようとするが、そこはさすがに関東ナンバーワンのミサイルズのディフェンス。リードブロッカーの森崎もろとも凱門をフィールドの外へ弾き飛ばした。

「ワイルドウィングス、3ヤード前進!」

審判が笛を吹いてプレーを止め、そう宣言した。

ここはやはり関東最強の政法大ディフェンスですね。山野大の攻撃を3ヤードで止めました。さあ、山野大の2nd down(攻撃2回目)。QB神くんはどんな攻撃を仕掛けてくるのか?

実況席では少し落ち着いた感じの解説者がそうしゃべっていた。

「よし、ここで一発デカイのぶちかますぞ。森崎と凱門はいつもどおりオレからボールを受け取るフリで走る。で、そこで右側に敵が多いようだったらどっちにもボールを渡さずオレ自ら左へ走る。セットしたときに右が詰まってると思ったら右足のつま先で2度地面をたたく。そしたら二人はオレをスルーしてLBのブロックに行ってくれ。左のレシーバーはまっすぐ前へ。コールワン、ブレイク!」

勇気が特殊なプレーをみんなに伝え、各ポジションに散った。

(どうやら敵さんは右サイドを警戒しているようだな……)

勇気はセットしながら相手を見渡すと、右足のつま先で2度地面

を叩き、

「Ready Set Hut!」

間髪いれず攻撃を始めた。森崎と凱門が勇気からボールを受け取るフリをして右へ抜けると同時に勇気が左へ走り出す。すぐにミサイルズ側もRBの2人がどっちもボールを持つてないことに気づき、勇気に向かってくる。そこで勇気は捕まる直前に前を走るレシーバー神田に投げた。ボールは完全にフリーになってた神田に渡り、そのままゴールラインを走り抜けた。

「タッチダ ウン!!!」

審判がそう叫び、スタンドからは歓声やため息が響き渡った。

開始2分、いったい誰がこんな展開を予想できたでしょうか……先取点を奪ったのは、山野大ワイルドウィングスだ つ!!!

再びテンションの上がった実況が叫び、

ミサイルズはキックオフリターンでボールをこぼして攻撃権を失ったの失点ですからシヨックが大きいでしょうね。

解説者はそう解説した。

「神田、ナイスキャッチだったぞ。さて、先取点を取れたが相手は強い。気を引き締めて守ろう。」

TFPのキックをきっちり決めて7-0としたワイルドウィングス。勇気がそう言っただけでキックオフ態勢を整えた。

「もう一度敵にボールをこぼさせるくらいの気持ちで行くんだ!行くぞ、ワイルドウィングス、オールメンラッシュ!レディー、ゴー!!!」

11th down:開戦・政法大ミサイルズ戦その1(後書き)

勇気の奇策が当たり先取点を奪ったワイルドウィングス。

試合前の予想を早くも打ち破った形になったが、この後はミサイルズの反撃が来ると思われる。果たして防ぎきれるか？

12th down：政法大ミサイルズ戦その2

キックオフのボールはまたも高く上がったが、今度は上がりすぎたのか、敵陣のゴールラインを超えて行ってしまった。

「ミサイルズ、タッチバック！」

審判がそう言い、

おっと、これはワイルドウィングスのキッカー・神くん、キックを飛ばしすぎましたね。相手のゴールラインを超えてしまったのでタッチバックとなりミサイルズは自陣の20ヤード地点からの攻撃になります。

解説者がかさず解説を入れる。

「さて：守備に入るが、おそらくうちの守備力じゃミサイルズの猛攻を止める事はほぼ不可能に近い。そこでだ……」

守備は出ない勇氣に代わりフィールドに入った浜崎がなにやら作戦を伝える。

「ま、マジっすか!？」

浜崎が伝えた作戦を聞いたほかの仲間が驚きの声をあげる。

「ああ、いたって本気だ。こうでもしないと敵の攻撃を止める事はできない。キーポイントは森崎とガイの2人。頼むぞ。ブレイク！」

浜崎がそう話し、各ポジションに散っていったが……

「んなっ!?!この守備陣形は……!?!」

QBが入った土井が浜崎たちのとった陣形を見て驚きの声をあげる。

「バカな!この段階でゴールラインディフェンスを敷くだ!?!」

ミサイルズの監督までもがベンチから立ち上がり叫ぶ。

ん?ワイルドウィングス、ここでまたも奇策か?ランプレーに特化した守り、ゴールラインディフェンスを敷いて来ましたね。しか

しこれはパスに弱いという致命的な弱点を持っているので普通は自陣のゴールラインギリギリまで追い詰められないと使わないフォーメーションのはずですが、いったいどんな思惑があるのでしょうか？解説者も驚きを隠せない感じの解説を入れる。

（まあ、これならパスでかなり稼げるな。神め、奇策がそうそう通じると思っちなよ……）

（こうでもしないとミサイルズの強力なランプレーは防げない。パスで攻めてくれれば確率は低いがインターセプトの可能性もある……頼むぞ、みんな……）

土井、そして勇気がそれぞれの思いをめぐらす中で、

「Ready Down Hut！」
レディー
ダウン

土井のコールで攻撃が始まった。

ゴールラインディフェンスの効果でランプレーでは進めないとわかっていても最初は力技でねじ伏せようとミサイルズのRBが中央突破を狙ってきた。しかし、ぎっしりと密集した場所を抜けることはできず、弾き飛ばされた。

「ミサイルズ、5ヤード後退！」

審判は笛を吹いてそう言った。

ゴールラインディフェンスでもかまわず中央突破を狙ったミサイルズ、これは判断ミスか、5ヤードの後退となります。

実況がそう言い、

ここはパスで攻めるほうが安全でしょう。実力差から言えばそれで確実にタッチダウンまで持っていけるでしょうね。

解説もずいぶんと落ち着いた感じでそういうのだった。

「Ready Down Hut！」

今度はボールを受け取ると同時に数歩下がり、パスで来たミサイルズ。きっちりパスを成功させ、12ヤード前進。ファーストダウ

ンまで残り3ヤード。

「Ready Down Hut!」

またもパスで攻めて7ヤード前進。自陣34ヤード地点でファーストダウン更新。

その後もしつこくパスで細かく稼ぎ、ミサイルズは敵陣のゴール手前10ヤードまで攻め込んでいた。

「よし、ここまで来ればオレたちにとってはチャンスだ。おそらくあのQBは最低限の距離でタッチダウンパスを狙ってくるだろう。

イチかバチかの賭けになるが、この中で一番足の速い森崎、インターセプトを狙っていけ。頼むぞ。」

浜崎が指示を飛ばし、

「はい!」

森崎も返事をして各選手ポジションへ散っていった。

さあ、ミサイルズの攻撃はタッチダウン目前です。ワイルドウィングスはこの攻撃を防ぎきれられるのか!?

実況がまたまたマイクをつかんで叫ぶ。

しかし、ここまでパスを無警戒というのものなんかおかしいですね。

ワイルドウィングスの守備陣は何か考えでもあるのでしょうか……?

解説はここまでの守備の様子から何かを感じたのか、そう疑問を呈していた。

「Ready Down Hut!」

土井は攻撃開始後すぐに数歩下がってパスを投げる態勢を作り、レシーバーがノーマークでゴールラインを超えたところを見るとボールを投げた。と、そのとき。土井の視界の隅から森崎がレシーバーに向かって突進し、その小さな身体でレシーバーの前に立ちはだかった。

(この身長差ならとれそうだな。タッチダウンはいただきだ！)

レシーバーがそう思いながら腕を伸ばそうとしたとき、森崎も腕をいっぱい伸ばした。

(み、見えない！)

レシーバーが必死に森崎をどかさそうとするが、すでに両者とも捕球態勢に入っているためろくに動けず、前に立っている森崎の腕にボールは収まろうとしていたのだが……

(よし、インターセプト大成功だ……あ　っ!!)

普段パスキャッチをやったことのない森崎では仕方ないことかもしれないが、キャッチしたように見えたボールは腕をすり抜けて落ちようとしていた。

しかし、地面に落ちるまさに直前、足元に走りこんだ凱門がボールをキャッチし、走り出した。

「いよっしゃあ　っ!!」

「イ、インターセプトだ！戻れ！早く戻るんだ　！」

土井があわててパスに出したレシーバーたちに戻るよう叫ぶ。しかし、凱門も森崎には負けるとはいえ40ヤード走4秒5の足の持ち主。これほどの足の速さは他のチームにもそうそういないもので、凱門は向かい来る敵を次々にかわしていった。

「フィールドの外へ押し出すんだ！」

ベンチから監督が叫び、腕でどついてバランスを崩させ、外に押し出した。

「ワイルドウィングス、インターセプトにより攻撃権ゲット！敵陣17ヤード地点よりファーストダウン！」

審判がそう宣言し、

なんとまたも番狂わせだ！ミサイルズのタッチダウン寸前でパスをインターセプトしそのまま逆にタッチダウン目前まで持っていた！

実況はさらにヒートアップして叫んでいる。

なるほど、ワイルドウィングスはこれを狙っていたのですね。こ

れは追加点のチャンスですが、ミサイルズは守りきれられるのでしょうか？

解説も実況ほどではないがアツくなってきたようで興奮気味に話している。

「ハマさんの作戦が大当たりしたな。森崎とガイ、ナイスプレーだったぞ。さあ、追加点を取りに行こうぜ！」

12th down: 政法大ミサイルズ戦その2 (後書き)

浜崎の奇策が大当たりし追加点を目前にしたワイルドウィングス。
このまま勝利することはできるのか？

解説タイム

今回は本編で解説者の人がかなり話しているのでなし。
個別にわからない点などありましたらメッセージまたは感想にて書
いていただければ解説を入れさせていただきます。

13th down: 政法大ミサイルズ戦その3 (前書き)

遅くなつてすいませんでした。

13th down: 政法大ミサイルズ戦その3

「よし、ここで追加点を取って相手にプレッシャーを与えていくぞ！」

攻撃に切り替わったことでフィールドに飛び出してきた勇気が作戦会議でみんなにそうゲキを飛ばす。

「って、あれ？ハマさんに柿坂、中村？みんな、交代したの？」

内山が普段攻撃時はベンチにいる3人に気づき、そうたずねる。

「ああ、森崎はさっきのインターセプトの時に足を少しひねったかなんかで休んでる。ガイも走ったときに足にわずかな違和感を感じて大事をとって休憩。神田は純粋なスタミナ切れ。こまめに交代しないと、なんか今日は疲れがひどいらしい。」

ベンチに下がった3人の状況を代わりに出てきた柿坂が説明する。「そうか、神田は1年だし、精神的につらいのかもかもしれない。あとは森崎とガイは回復してくれることを信じるしかない。あいつらのいない間は残りのメンバーで頑張ろう！もしみんなも神田みたいに疲れたら同じポジションのやつとうまくチェンジしながらこの試合乗り切っていこう。」

勇気は大きく一息つくくと、みんなを励まし、次の攻撃を説明し始めた。

「次はこないだの練習でやったあの複雑なプレーを使うぞ。まずR B柿坂にピッチして、右の大外オープンに行くように見せかける。そこで相手が止めにきたら右のWR河嶋に渡して逆サイドへ走る（リバース）。そして相手が流されて左にきたらオレの近くで待機しているハマさんに渡して再度右へ。もし相手が動かなければそのまま左サイドへのプレーで。最後の判断は河嶋に任せる。これはラインの壁がどれだけ持つかがカギになるから、みんな、頑張ってくれ。コールワン、ブレイク！」

と、かなり複雑なプレーの説明をし、各ポジションへ散っていつ

た。

「Ready Set Hut!」

勇気のコールで攻撃が始まり、まずRB柿坂へボールが渡り、右の大外へ走る。

「オープンだ！これ以上進ませるな！」

ミサイルズの守備陣、特にLBとCBが柿坂を止めるために向かっってきた。そこで柿坂がCBと押し合いをしていた河嶋が離れたところを見計らってボールを渡し、代わりに自分がCBのブロックに入る。

「ゲツ、リバーすだ！逆サイド、止めるー！……うわっ！」

柿坂に向かっってきていたLBはリバー스에気づき、方向転換をしようとしたところで地面の芝につまづき、派手に転んだ。

一人転んで止めに行くことは出来なくなったが、それでも他の守備陣が河嶋に向かっってきた。河嶋は敵の守備を十分ひきつけたところで、待っていた浜崎にボールを軽く投げて渡す。

「っしやあ！行くぜ！」

浜崎は一声咆えると、柿坂がブロックしているCBと、またいまだに一人転んで起き上がれないLBを飛び越えて走り出した。

ダ、ダブルリバーす！？ヘタすればほとんど進めない、最悪の場合ロスすることもありうる危険なプレーをここで出してきましたワイルドウィングス、相手の虚を付きぐんぐん進んでいき、今タッチダウン！追加点をうばい、これで13-0！王者政法大相手に健闘しています！

実況、そして観客までも驚きで言葉をなくす中、解説者の淡々とした声が響き、浜崎が追加点となるタッチダウンを奪ったのだった。「やった！ハマさん、ナイスラン！」

勇気がハイタッチで浜崎を迎え、

「うぐぐ……やはり相手が山野大だからといってQB土井以外2軍選手を使ったのは失敗だったか……止むを得ん、土井以外全員交代だ。お前ら、準備はできてるな？」

政法大ベンチに動きがあった。監督が後ろに控えていた選手たちにそう問うと、

「はい！」

男たちの声がそろった。

「それじゃ、次のキックオフリターンからお前らの出番だ。終止符ししおを打って来い！」

政法大の監督がそう言っているころ、勇氣はTFPのキックをきっちり決めて14-0とリードを広げていた。と、そこで第1Qが終了した。

「よし、基本はさっきと同じだ。チャンスがあればどんどんインタビューセプトを狙っていけ、いいな？」

第2Q、勇氣がキックオフ前にみんなに作戦を話す。

「あれ？ミサイルズの連中、メンバーを総入れ替えにしてきたぞ。

何かやってくるつもりか？」

一橋が相手のメンバー交代に気づきそう言った。

「なんか雰囲気さがさきまでと違う。気をつけたほうがいいかもな。」

勇氣がそう言ったところで、

「神、気をつける！ミサイルズの先発メンバーは普段控えに回ってたやつらで、今いるのがレギュラーメンバーだ！実力が数段違うらしいぞ！」

ベンチから小笠原が勇氣に注意を促す。

「わかった！」

勇氣はそう返事をする、みんなに目配せをし、キック態勢に入った。

おっと、ここでミサイルズはメンバーを総入れ替えできましたね。あつ、今情報が入りました。どうやら先発していたメンバーが普段の控えで、今出てきたのがレギュラーのようです。これはワイルドウィングス、絶体絶命か？

実況が伝え聞いたことを話す。

「相手がレギュラーだとしても、攻撃権さえ渡さなければ問題は無い！行くぞ！レディー、ゴー！」

勇気のその掛け声とともに、ボールが飛んだ……と思いきや、ボールは地面を転々と転がっていた。

「オンサイドだ！押さえるー！」

なんとここでオンサイドキックを使ってきました山野大！激しいボールの奪い合いを制するのはどっちだ！？

これは敵味方入り乱れてボールの取り合いをして押さえたほうが攻撃権を得るといふ、キックオフをしたほうにとってはかなりの賭けですね。

実況、解説ともに驚きと興奮が混じったような声で話しているなか、ボールを押さえたのは

13th down: 政法大ミサイルズ戦その3 (後書き)

ここまで戦っていたのは普段控えのメンバーだとは、勇気たちもなめられたものだ。

しかし、レギュラーを引きずり出したことでより激しさを増すことは間違いない。

果たしてまだ前半のこの試合、どんな結末が待っているのか？
質問などありましたらお待ちしております。

14th down: 政法大ミサイルズ戦その4 (前書き)

自分にしては非常に珍しい2話同時更新。
理由は……聞かないでください(笑)

14th down：政法大ミサイルズ戦その4

「攻撃権は……山野大ワイルドウィングス！自陣35ヤードからの攻撃！」

審判が笛を吹いてそうジャッジを下す。ボールは蹴った勇氣自ら確保していた。しかし……

「さあ、こうげ……ぐうつ！？」

ボールを審判に渡して作戦会議のためにみんなを集めようとした勇氣が突如としてうずくまってしまった。

「神さん、どうしたんですか？」

足の違和感から復帰した凱門がたずねる。

「くそつ、さつきボールを確保したときに相手に押しつぶされたみたいだ。すまねえ、柿坂と交代する。」

勇氣は足を引きずりながらベンチへ戻り、代わりに柿坂が入った。「神さんがケガで離脱したけど、オレだってある程度のことではでき。神さんが自分のケガと引き換えにしてまで取った攻撃権、無駄にはしない。行くぞ！ガイの大外^{オープン}へのランだ。コールワン、ブレイク！」

柿坂がプレーを決め、各選手位置についた。

「Ready Set Hut！」

柿坂が内山からボールをスナップされ、すぐに凱門へ下投げで放る。凱門はサイドラインギリギリを走り出したが、レギュラーに交代したミサイルズの選手の動きは今までの比じゃなく、危険を感じた凱門はサイドラインの外へ逃げ、タックルを防いだ。これで4ヤード前進。

と、そのとき。

「ちつ……逃げ足だけは速いな。だけど次はねえ。プチつと潰してやるよ。」

ミサイルズの選手の一人が凱門を挑発して去っていった。

「Ready Set Hut!」
河嶋へのパス。しかし、CBに弾き落とされ失敗した。

「Ready Set Hut!」
ここで復帰した森崎を使い、さっきとは逆に左へのプレー。しかし、柿坂と森崎の動きがわずかにずれ、ボールの受け渡しに失敗したので、柿坂は自ら走ったのだが、すぐに潰され、逆に2ヤードの後退となった。

さあ、政法大のレギュラーメンバーはやはり強力ですね。山野大の攻撃をほとんど進ませず、4th downのパントキックで攻守交替となります。

しかし、山野大は先ほどのオンサイドキックの際にキッカー神くんが負傷で抜けていますのでパントキックもあまり飛ばせないでしょう。政法大、反撃開始です。

「Ready Set Hut Hut Hut Hut……」

柿坂がキックプレー特有のコールとともにプレーを始め、あまり慣れていないパントキックでボールを蹴飛ばした。

しかし、ボールはあまり飛ばず、ボールをキャッチした政法の選手は余裕の笑みを浮かべてその場にひざをついた。

「政法大、自陣33ヤードからの攻撃!」
審判がそうジャッジを下した。

そこからは完全に王者・政法大のペースだった。第2Qの残り10分ほどであつという間に3つのタッチダウンを奪って逆転し、どうにか復帰した勇気の奇策を交えた攻撃もまったく通じず、後半に入り第3Qの15分でさらに5つのタッチダウンを重ねられ、第4Qに入ったとき、得点は14 - 56と山野大にとって絶望的な点差がついていたのだった。

14th down: 政法大ミサイルズ戦その4 (後書き)

圧倒的な実力差を見せ付けられ大差がついたこの試合。
このまま勇気たちはあきらめてしまうのか？

15th down: 政法大ミサイルズ戦その5 (前書き)

さあ、いよいよ最終第4クォーターへ。
点差は42点と絶望的だが……!!?

15th down: 政法大ミサイルズ戦その5

「くそつ、もうあと第4Qの15分しかないのに42点差かよ。このままじゃ勝ち目はゼロに近いか……」

後半最初のタイムアウトを使った勇氣は、控え選手も全員集めて作戦会議を開き、その中で柿坂がそうつぶやいた。

「ああ、たしかにこのままじゃ間違いなく負けるな。だけど、あれを見るよ。」

勇氣がそう言っただけでフィールドの反対側の政法大ベンチのほうを指さす。すると、それまで大量点を取って逆転する原動力になっていたレギュラーメンバーたちが防具を外してベンチ裏へ消えていった。「いくら実力差があるとはいえこんななめられたままあきらめていいのか？ たとえ負けるとしてももう一度あのレギュラーメンバーを引きずり出すくらいの気持ちで戦うぞ！」

勇氣がゲキを飛ばし、「おう！」と他のメンバーが応える。

「おや？ 政法大は第4Qに入ったところで第2Qに総入れ替えでベンチに下げたメンバーを戻してきましたね。これは勝利を確信した余裕のあらわれでしょうか？」

解説者も政法大のメンバーチェンジに気づいてそんなことを言っていた。

「相手がメンバーを最初に戻したことで限りなくゼロに近づいた勝率が数パーセントに回復したかな。それでも42点差をひっくり返すのは難しいかもしれない。けどオレたちは絶対あきらめない！」

勇氣の声と仲間の声がびつたりそろい、それが観客に届いた……のかどうかはわからないが、

「山野大、あきらめるなー！」

「王者と呼ばれていい気になつてる政法大を打ち破つてくれー！」

「がんばれー！」

それまでほとんど政法の応援ばかりで勇気たちにとってはアウエー状態だったが、ここに来て山野大を応援する声が増えてきてるとに気づいた。

「みんな……この声援に報いるためにも、少しでも政法との点差を縮めよう！いきなり奇策を仕掛けるぞ！ダブルリバースの逆バースジョン、メンバーもうちの主力RBが復活してるからタッチダウンまではいかなくてもファーストダウンまでは行こう。頼むぞ、ラインのみんな！」

勇気が次のプレーを決め、みんなに伝える。と、そのとき。

「タイムアウト！」

政法大の監督もタイムアウトを使って選手をベンチに呼び戻した。

「政法大、タイムアウト。後半1回目。」

審判がタイムアウトを認め、両チームの選手が再びベンチへ戻る。「オレたちレギュラーメンバーが逆転してこんな点差までおまけたんだ。これで守りきれなかったらお前らいい笑いものどころかこの部にいられなくなるぞ。」

ずっとQBとして出続けていた土井がそうゲキを飛ばし、横で監督も頷いていた。

「まあ、オレが言いたいのは土井とほぼ同じだが、もうひとつ追加することとして、この残り時間で活躍したヤツは来年からのレギュラー昇格もありうるからな。気合入れていけよ。守備では相手に1点も許さず、攻撃はあと最低でも1タッチダウンは取って来い、いいな！」

監督が土井に続けて怒鳴る。

「はい！」

選手たちが気合の雄たけびをあげたところでちょうどタイムアウトが終了し、各ポジションへ散らばっていった。

15th down: 政法大ミサイルズ戦その5 (後書き)

王者・政法は余裕たっぷりにメンバーを最初に14点先制されたメンバーに戻してきた。

このメンバーチェンジが勇気たちにとって追い風となるか!?

16th down: 政法大ミサイルズ戦その6

「Ready Set Hut!」

勇気のコールで最終第4クォーター、そしてワイルドウィングスの攻撃が始まった。

まず勇気から下投げで凱門へボールが渡り、左のサイドラインギリギリを走ると見せかけ、守備の選手が近づいてきたところで左のレシーバー神田に代わって入っている中村に渡す。そのまま右サイドへ走り、逆サイドのLBとCBが止めに来たところで森崎がすれ違いざまにボールを受け取り、左右の大移動によってわずかに隙が生まれた中央を強引に駆け抜けていった。

「またダブルリバーースか！そう何度も通じると思うな！」

強引に突破した先では最後の砦となるSが2人待ち構えていた。

しかし、森崎はフェイントで2人をあつという間に抜き去っていた。あまりの速さにフェイントでかわされたSの2人は森崎に抜かれた直後、互いに激突してフィールドに倒れていた。

「タッチダウン!!!」

審判が笛を吹き、両手を高々とあげた。

「っしやあ！森崎、ナイスラン！これで20 - 56、まだまだ点差は大きいけどこの調子で行けば追いつけない点差じゃないんだ！」

勇気がハイタッチで森崎を迎え、点差を縮めたことを素直に喜んだ。キックももちろん決まり、これで21 - 56と35点差に追いつけた。

キックオフではギャンブル性の高いオンサイドキックを仕掛け、戸惑うミサイルズを尻目に攻撃権を奪い、さらにタッチダウンを重ねていき、残り時間1分、得点は54 - 56となっていた。ちなみにタッチダウン4本、キックも全て決めて28点を追加する合間にフィールドゴールで3点、またキックオフで相手を自陣ゴールライ

ンギリギリから攻撃させ、相手の攻撃をゴールライン内で潰す、攻撃側にとって最大の屈辱「セーフティー」を食らわせ、2点を取ったりして、あとキック1本で逆転できる得点差になっていた。

「ここまでオンサイドキックを成功させまくり、ついにあとキック1本で逆転できる点差にまで持つてこれた。だけど、ここが正念場だ。このオレたちのキックオフが全ての運命を決める。このキックを政法大が押さえればその時点で政法の勝利が確定する。逆を言えばオレたちが押さえられればキックで最後のバクチに出ることができる。こうなつたら作戦も何もあつたものじゃない。計22人による究極の力と力のぶつかり合いだ。キッカーのオレは明らかに出遅れる形になるからボールの奪い合いには参加できない。無責任かもしれないが、取ってくれ、頼む。」

「勇気がそうみんなに言うと、
「任せる、ここまで連続でオンサイドキックを成功させてきたんだ。最後まできっちりシメようじゃないか。」
石町が勇気の肩を叩いてそう返す。」

さあ、いよいよ試合も残り時間1分少々、山野大のキックオフで試合再開となります。

ここはまず間違はなくオンサイドキックで来るでしょうね。ボールを政法大の選手が押さえた時点で政法大の勝利が決まってしまう。なぜなら攻撃側は25秒以内に攻撃を始めればいいのと、3回の攻撃権があるので25秒×3で残り時間をすべてつぶせてしまふからです。山野大としてはわずかな望みをつなくためにもこのキックオフは失敗できないでしょう。

実況と解説がこの試合最後の見せ場を興奮気味に語っていた。

「ワイルドウィングス、オールメンラッシュユ！レディー、ゴー！」
両チームの命運を賭けたキックオフ　オンサイドキックがいま、

ワイルドウイングス激闘史

放たれた。

16th down: 政法大ミサイルズ戦その6 (後書き)

奇跡的に2点差まで追い上げた勇気たち。

そして残り時間1分、最後の闘いが始まる。

試合を制するのはどっちだ？

17th down: 政法大ミサイルズ戦その7 (前書き)

いよいよ試合の運命を決める最後のキックオフが放たれた。

17th down：政法大ミサイルズ戦その7

ボールは地面を転々とし、ボールを奪おうと飛びかかる選手たちの間をすり抜けて転がっていった。

「そこだ！オレたち政法はお前らなんかに負けるわけにはいかない！」

「ここまで追い上げたオレたちの最後の底力、見せてやるぜ！」

最後は政法・土井と山野・凱門の一騎打ちとなった。二人が同時にボールに飛びつき、そのままつれ合って地面に叩きつけられた。

「ボールを取ったのはどっちだ！？」

残りの選手たちが近寄ってきて二人を見ると

「ん、これは 二人が同時にもっていて離さない！？地面についてなお奪い合いをしているが……」

勇気が二人の様子を見てそういったとき、ついに凱門がボールを土井の手から引き離れた。

「やった、これでオレたちの攻撃だ！」

凱門がボールを手に立ち上がるが、勇気をはじめとするワイルドウイングスの選手は沈んだ顔でヘルメットを外していた。一方、ミサイルズの選手はほっと胸をなでおろすものやガッツポーズをして喜ぶもの、さまざまだった。

「終了！攻撃権は政法大ミサイルズ！」

審判が笛を吹いてプレーを止め、そう言った。

「な、なんで……ボールを取ったのはオレなのに……」

凱門が審判に詰め寄らんばかりの勢いでたずねる。
「両者ボール確保のまま同時に地面に付いた場合、本来攻撃権を持つ政法大が優先されるのです。」

審判はそう答えた。

「そうですか……」

凱門はまだ微妙に納得してないようだったが、ここで判定が覆るわけはないから、と勇気になだめられ、あきらめた。

ピ　　ッ！！

そのまま試合終了の笛が鳴り響き、闘いは終わった。

「神」
勇気たちが荷物をまとめて撤収しようとした、そのとき。

「なんだ？敗者を笑いにでも来たか？」

「いや、違う。いくらうちのいわゆる二軍が相手とはいえ54点もとられるとは思わなかった。途中でレギュラーを出さなかったら才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

「神、試合は才

試合はごらんのとおり政法大ミサイルズが56―54で勝ちました。大方の予想をいい意味で裏切るいい試合でしたね。

ええ、そうですね。これはもう山野大のことを弱小なんて言えませんね。部員不足に悩む山野大ですが、今シーズンの成績ならかなり自信を持っていいでしょう。監督もいないチームですが、来年はさらに楽しませてくれるかもしれないですね。

実況と解説が最後にそう言って終わった。

「オレたちのシーズンは終わった。さあ、大学に帰ってミーティングしたあと、4年生の引退式だ。最後までいはいはきっちり締めようぜ。オラオラ1年ども泣いてる場合じゃないぞ！」

17th down: 政法大ミサイルズ戦その7 (後書き)

結果的に試合には負けたものの、王者政法を相手に良く戦った。
やはり土井と勇氣は永遠のライバルとなるらしい……

1 8 t h d o w n : エピローグ (前書き)

無敵の4連覇を達成した政法大のその後は ?

18th down:エピソード

関東4連覇を達成した政法大は、その後年末に行われた東西大学王者決定戦「甲子園ボウル」でも関西代表の学^{がくりつかんだいがく}律館大学パンサーズを24-23の接戦で破り、またさらにその先、年明け早々にある社会人王者との日本一決定戦「ライスボウル」でも勝利したことでこれまで関東大学リーグと甲子園ボウルを3連覇してきた政法大が唯一手に入れられなかった日本一の栄光をも手に入れたのだった。

それから1年の時が流れた。

勇気たちワイルドウィングスは春に20人もの新人部員を迎え入れ、さらに他大学の元監督だったという人物が監督として就任し、去年のシーズン開幕前までとは見違えるようなチームになっていた。

夏の合宿を経て、シーズン開幕まであと1週間と迫ったある日のこと。

「もうすぐシーズン開幕か。去年の連戦連勝を去年だけで終わらせないように、そして強く生まれ変わったワイルドウィングスがずっと続くようにしないとな。」

4年生になって主将の座を降りた勇気がミーティングで今年の開幕戦の相手となる政法大のビデオを見ながらそうつぶやく。

「去年の最終戦の相手が今年の開幕戦か。去年の2点差の雪辱を果たしてやるうじやないか、なあみんな？」

今年の主将、3年生になった森崎がみんなに向けてそう言つと、「おう！」

きれいにそろった声が返ってきたのだった。

そしてあつという間に1週間が過ぎ、開幕戦の朝を迎えた。

「さあ、今年こそリーグ制覇するぞ！まずは因縁の対決を制す！行くぞー！」

「おう！」

この時点でまだ彼らは知る由もなかった。この2カ月後、リーグ戦を4勝1分けで制し、さらに甲子園ボウルで初優勝を遂げることが

18th down: エピソード (後書き)

こんなマニアックなストーリーに最後まで付き合っていた方に
々に深く感謝いたします。

この物語でアメリカンフットボールに興味を持ってくれる人が増え
るといいなとか考えている作者なのでした。

感想などお待ちしております。

新作は現在構想の最終段階に入っておりますので近いうちにまた始
めるかと思えます。その際はまたよろしく願います。

ちなみに、今度はもうスポーツ系ではありません。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2441b/>

ワイルドウイングス激闘史

2008年11月7日07時22分発行